The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Gallia　56号　HOMMAGES
Author(s)	
Citation	Gallia. 2017, 56, p. 93-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69835
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラテン語とフローベール

足立　和彦

1997 年度に仏文学科に進学した私は、学部および大学院在籍時に、金崎先生の授業を受けさせていただきました。ウェルギリウスの『牧歌』でラテン語に初めて挑戦し（見事に討ち死にし）たことは、たいへん貴重な経験でした（当時気負って購入したガフィオ羅仏辞典は今も部屋を飾っております）。また、なによりフローベールの『ボヴァリー夫人』（クラシック・ガルニエ）や『感情教育』（GF フラマリオン）購読の授業は、当時研究対象をモーパッサンに定めたばかりの私にとって、なによりありがたいものでした（恥ずかしながら、そのことが本当に理解できるようになったのは後になってからですけれども）。当時使ったテクストを開いてみると、授業の光景が思い出されて懐かしい思いが溢れます。自由間接話法や接続法大過去といった 19 世紀小説を読むための基本を教えていただいたことはもとより、細部を丁寧に拾いあげることでフローベールのテクストの妙味を明らかにしていく金崎先生の読解のおかげで、モーパッサンが終生師とあがめたフローベールの偉大さを、私でも具体的に実感することができた経験は、その後、この二人の作家のテクストを読んでいく上で、一つの指針として私の中にありつづけています。

金崎先生がご退職されるという事実に、まことに月並みながら年月の経つ早さに戦くような気分でいます。いつでも温厚かつ丁寧にご指導いただきましたことに御礼申し上げますとともに、今後ますますのご健康とご活躍をお祈りいたします。金崎先生の読解をお手本にして、これからもテクストの精緻な読みを試みていきたいと思います。

（名城大学准教授）

金崎先生の思い出

井元　秀剛

私が阪大に赴任したのは 1993 年 10 月、その頃金崎先生は在外研究に行かれていて留守で、私は先生の研究室に間借りすることになった。当時は教員の数が多かったのか研究室も共同のことがあり、私たちの研究室も日本語の山田先生とご一緒で、形の上では 3 人の研究室ということになっていた。とはいえ、机は 2 つしかなく、私はもっぱら金崎先生の机を使わせていただくことになる。先生のお荷物には手をつけてはいけないはずなのだが、何せ山田先生がいらっしゃらない

ときは私一人、見るなと言われても、（そんなことは実際には言われていないのだが、もし言われていたならなおのこと）、見てしまう。書物の方は専門が異なるので、まあそんなものですか、という感じだが、驚いたのは資料で、教授会の資料など、きちんと整理されていて、いつのものでもたちどころに出てくるようになっていた。私などは終わってしまえばそれまでで、というより教授会の時すらほとんど見ていないのだが、こんなに几帳面に整理されているのかと感心していた。後日、めったに見ることのない教授会資料が必要になったとき、このときのことを思い出し、先生にお願いして見せてもらったことがある。

この奇妙な同居は先生がお戻りになる頃には解消され、実際に同じ研究室にいて仕事をしたことはない。もしあったらたくさんのことを教えていただけたのではないか、と思うと残念な気がする。と、ここまで書いて、いやそうでもないかなと思い出した。先生は夏の暑い日でもなかなか冷房をおつけにならない。研究室のドアを開けっ放しで仕事をなさる。だから用事があるときには気軽に訪ねて行けて便利なのだが、何せ暑い。一緒だったら、「先生、ドアを閉めて冷房をいれましょうよ」などと私がねだる羽目になりそうなのである。もっともねだれば優しい金崎先生なので、「何だ軟弱だなあ」などと笑って了承してくださるような気がする。

先生の気質は実に穏やかで、怒ったり興奮なさったりしたところを見たことが一度もない。そんなわけで誰からも慕われ、研究科長の要職にもおつきになった。在職中は自分が科長でなかった頃のごたごたの処理にも追い回されて大変だったことが傍から見てもよくわかるぐらいだった。それでも、落ち着いて淡々と事に当たられ、ご立派だったなと今でも感心する。私は先生の在職中、ずっと最年少の教員で、「井元君、このようなことは若いものが進んでやらなくちゃだめなんだよ」とよくたしなめられた。「ああ、すみません」と言いながら気の利かない私はなかなか対処できない。

先生は最後の最後まで、言語文化学会の委員やら教務委員やら大変な仕事をお引き受けになっていた。なにせ最年少の私が頼りないのだからしかたがないと思われてのことだろう。今、その言語文化学会の仕事を私が引き継いでいるが、未だその指導を仰いでいる感じである。先生がいなくなってしまったらどうなってしまうのだろうと、私は同僚というより、自らの先生を送るような気持ちで日々を過ごしている。

（大阪大学教授）

金崎先生の思い出

岩根　　久

来年の３月に金崎先生、春木先生とお別れせねばならぬかと思うと、何とも形容し難い寂しさが胸に沸き起こってきます。両先生それぞれについて、この思いの強さは全く変わりませんが、お一人お一人にメッセージをということなので、ここでは、金崎先生への思い出を書かせていただきます。

実を言うと、金崎先生は私の恩師ではなく先輩なので、金崎さんで構わないようなものの、今となっては、金崎「さん」以上の存在なので、他に言いようもなく、金崎先生と書いたりするのですが、思い出の内容が、金崎さんと書いた方がいいような気がするので、以降、金崎さんと書きます。

私が金崎さんに初めてお目にかかったのは、金崎さんが京都大学から、大阪大学文学部の大学院に入ってこられたときです。当時の私は、北村さんをはじめ大阪大学の先輩しか知らなかったので、金崎さんに対して興味津々で、積極的にアプローチし、女性の先輩の下宿に連れて行ったりもしました。その女性の先輩が金崎さんの現在の奥さんです。しばらくして、その女性の先輩の下宿に遊びに行くと、すでに金崎さんがいたりして、あれれ、と思いました。それから時がたち、結婚式は夏の季節だったと思います。場所は、宝塚線の売布神社駅にあった松風閣という瀟洒なホテルでした。ああ、懐かしいなあ。

金崎さんは、穏やかな物腰でありながらも、決めるときには決める力は素晴らしく、その泰然自若たる姿勢は、とても真似などできるようなものではありません。言語文化部長や研究科長を歴任されたのもなるほどと思われます。すごいですよ、それは。

さて、これまでにも色々な場面で金崎さんにはお世話になっていますが、実は、これ以上の恩義はないというほどの恩義が金崎さんにあります。それは就職のことです。色々と迷っていたとき、背中を押してくれたのは金崎さんでした。なので、私が現在この職にあるのは、他でもなく金崎さんのおかげです。ほんとうにありがとうございました。

最後に、昔言文におられた高岡幸一先生発明の謎かけがあります。金崎さんとかけて、用心深い見世物小屋と解く。その心は「カネ先」。おあとがよろしいようで。

（大阪大学教授）

温厚にして明敏な秀才

柏木　隆雄

金崎春幸さんが停年を迎える。年を取った人間は、後輩をいつまでも若い、若いと見るもので、そんな年になったかと、改めて指を折ってしまう。金崎さんと初めて言葉を交わしたのは、1983年3月のある日。私が神戸女学院大学から4月に阪大文学部の助教授で赴任するにあたって、同じく4月言語文化部の講師となって移る仏文研究室助手の金崎さんと、新しく助手に採用される北村卓さんと合わせて、二人を私に引き合わせようと赤木昭三先生が場を作ってくださった時だ。場所は先生が当時そういう機会によく利用されていた蛍池駅前の「うを國」（今は無いその店名は、岩根、北村両氏の教示による）。どんな話をしたかは、今は記憶が薄れているものの、お開きになって店の外に出たら雨が降っていて、小走りに駅に向かいながら金崎さんに、「時に君は何歳ですか？」と聞いたのを鮮明に覚えている。その時の返事で彼と7つ違いだということを知った。変なことを聞くなぁという顔をした金崎さんが印象深かった。

彼が阪大の院に来た時には、私はもう神戸女学院に就職していて、以後ほとんど阪大の方に顔を出していなかったから、秀才の噂だけ聞いて人となりを知る機会がなく、その沈毅な風貌に、つい年齢を聞きたくなったのだろうと思う。じっさい赤木先生は金崎君の才能をとても評価されていて、会話にもそれが窺い知れた。金崎さんが著書の後書きで、「修士論文は良かった」という赤木先生の讃辞が、10年、20年と続いて、その後の論文は修論を超えていないのか、と哀しくなったと謙遜も込めて述懐しているが、それは彼も承知しているように、赤木先生一流の「励まし」である。

つい先だっても、机を整理していたら、『謎解き「人間喜劇」』の出版記念会の際、当日急用で欠席された赤木先生のファックスのご挨拶が出てきて、そこには「柏木流の作品解釈学も、（中略）今やいかにも手慣れたという様を呈しておりますが、これは、しかし、逆にいうと、研究がマンネリ化するおそれなしとないということでもありまして、このあたりでひとつ、そのスタイルを破って、論文に新風を吹き込む」試みをして欲しい、と結ばれている。まことに耳痛い言葉で、研究のスタイルが一旦自分でこうと形が決まると、そこからなかなか抜け出せない弊を厳しく指摘されていて、よし頑張ろう、という気にさせられる。金崎さんの『フローベール研究―作品の生成と構造―』（阪大出版会、2014）は、激賞された修論のスタイルをみごとに超えた大著というべき作品だ。

私は典型的なB型人間で、金崎さんなど沈着な秀才とは全く違うと自覚しているが、彼も同じ血液型で、彼と同じ系統のように思われる石井洋二郎氏もB型であるところから、俗流血液型人間学はこれだけでもその信を疑われる。しかし相手は知らず、私自身は大いに親しみを感じていて、よく遊びに引っ張り出して閉口されている。中でも彼がパリに在外研究中、ご家族が先に帰国されたのをいい

ことに、ストラスブールのセジャンジェ教授宅を一緒に訪問することを計画して珍道中を繰り広げたことは、『ガリア』第47号で彼も書いているが、もう少し付け加えれば、パリからストラスブールに着いての昼食は、当地に一軒だけの三つ星レストラン。昼のメニューは魚、肉料理の選択となっていたのを、前菜から美味しい、美味しいと給仕相手に喋っていたら、日本の客と知ってシェフが登場、話がはずんで、それではメインの選択の両方を食べて欲しい、とA、B両メニューを一度に味わうことになった。ワインも加わって食事が終わったのが午後4時頃。さてセジャンジェ宅訪問は5時くらいとなっていて、お腹はぱんぱん。彼女は夕食の準備に大わらわで、沢山の料理を用意してくれている。さすがに三つ星レストランで先ほどまで食べていたとは言えず、午後7時くらいからまず彼女手作りのキッシュ。さて次々に出てきた料理やワインを何事もなく味わっていく・・・はずが、何皿目かでうっと詰まった。それからそっと席を立ってトイレに行き、例のローマ式饗宴に倣い、何食わぬ顔を装って次の料理へと進んだが、金崎さんも書くとおり、「しゃべらず、飲まず、食べず」の状態となってしまって彼を驚かせた。

金崎さんが言語文化研究科長でいた時、文科省の外国人教師の身分変更に関して文学研究科の私と二人、本部の事務局長を訪れて事情を説明し、善処を約束してもらったのも、金崎さんの沈着な交渉のおかげだ。そのほか彼から助けられたことは数知れない。いつもちょっと離れつつ、身近で心配そうに見守ってくれている。研究もまた同じだ。さて、これから今よりは時間ができるだろう。次の大作を期待してやまない。

（大手前大学大学院研究科長）

実は先輩だった先生（1）…金崎先生

加藤　靖恵

金崎先生は、学生時代は後輩たちとちょっと距離をおいたクールな秀才だったと伺ったことがあります。いつも穏やかで、冷静で、酔ったところなど拝見したことがない（他の先生もそうですが）、そんな先生とご一緒するときは背筋が少し伸びる感じです。よく考えたら私は同じ研究室の後輩にあたるのですが、そう思うだけで申し訳ない気持ちで一杯になります。

にもかかわらず先生にはあつかましくも親近感を抱いているのは、奥様の博子先生が、ディソン先生の授業を聴講していらして、学部時代からお世話になったからかもしれません。「私とあなたは似ているところがある」と言っていただいて有頂天になり、また「彼は若いときは素敵だったのよ」とこっそり教えていただいて、今でも素敵です、と心の中でつぶやきつつ、阪大仏文で頑張れば出会いが

あるのかと希望をもったものです。サバティカルでパリにいらしたときは、私も留学中で、金崎先生とフローベールの草稿セミナーで何度かお会いしました。御滞在中のアパルトマンにて、現地で料理も勉強していらした博子先生の手料理をご馳走になったこともあります。メインは確か栗をつかったおいしい肉料理でした。阪大の博士課程に戻った後、先生と柏木先生がフローベール研究会でご発表されるのを聴きに私も名古屋に行き（そこが未来の勤務校になるとは夢にも思わず）、帰りにお酒が飲みたいとお願いし、石橋駅近くで地酒を味わいつつ、研究のアドバイスを頂きました。

先生が書きためられた宝石のような論考を納めた『フローベール研究―作品の生成と構造』の頁をわくわくしながらめくりつつ、私の頃はフローベール演習は赤木先生だったけれど、金崎先生の専門の授業も受けてみたかったと思う今日この頃。先生の緻密な生成研究、そして色彩豊かなテーマ研究は、私の目標とするお手本です。

（名古屋大学文学研究科准教授）

金崎さん、ありがとう。

北村　　卓

金崎さんは私より２つ年長だが、学部時代にサンケイ・スカラシップでフランスに留学されていたことなどもあり、修士課程入学は私の１年後になる。当時の阪大仏文の研究室は学生たちの溜り場になっていて、灰皿には吸い殻があふれ、山積みとなった少女マンガ雑誌の上にはかつての遺産の白いヘルメットが鎮座ましまし、臭気漂う使い古された黄土色のソファーでは昼寝をしている者もいた。金崎さんはこうした雰囲気にはまったく染まらず、いつも飄然と現れ、黙々と勉強をし、うろうろしている私たちを尻目にさっさとフローベールの『三つの物語』に関する秀逸な修論を仕上げて、駆け抜けていった。その後金崎さんは、助手を１年務められてから言語文化部（後の言語文化研究科）に移り、そこで部長、評議員、研究科長を歴任され、その誠実な人柄で私たち同僚の深い信頼を勝ち得たのである。その仕事ぶりは、自身のご研究に対するのと同様、徹底して厳密で、同時に周囲への配慮に富むものであった。

さて、金崎さんは終始穏やかな風貌ではあるが、つねに一本筋の通った気骨があり、決してここは譲らないという頑固さを備えている。どちらかというと寡黙なので、一見したところややとっつきにくい印象を与えることもあるが、その内面は豊かで実に味わい深い。金崎さんは若い頃からすでに老成した風格を備えていたが、私はそこにいつも小津映画に登場する笠智衆のイメージを重ね合わせていた。先日、山田洋次の『男はつらいよ』シリーズで有名な葛飾柴又の帝釈天（経

栄山題経寺）を訪れる機会があったが、そこでも金崎さんのことを思い浮かべてしまったのだった。御前様役の笠智衆は必ずしも金崎さんのキャラクターではないのだが、それほどまでに私の中でこの両者は強固に結びついてしまっている。となれば私は金崎さんに叱咤される寅さんということにでもなるのだろうか。

言語文化研究科のフランス語教室では、年に何度か酒食を共にする機会があるが、カラオケでの金崎さんの歌声も忘れがたい。春木さんがJ-Popの女性シンガーの曲を好まれるのに対し、金崎さんはいつも美空ひばりで、なかでもお気に入りは「りんご追分」である。金崎さんのお人柄がすべて凝縮されたような歌いぶりには、うまいへたなどというレベルを超越した一種の感動があった。

ご定年という事実がいまだ信じられないのだが、金崎さんは今後公務から離れてもマイペースでご研究を続けていかれるに違いない。そして涼しい顔でまた大きなお仕事を成し遂げられるのだろう。いま金崎さんを失うことは、私たちにとってほんとうに大きな痛手なのだが、心からの感謝とともにお送りしたい。

（大阪大学教授）

金崎春幸先生に教わったこと

髙岡　尚子

何度もの引っ越しを重ねても、手元に置き続けているものがいくつかある。中でも、大学時代に授業で使っていたテキストの類は、現在、教える側の身になった私にとっては、多くのヒントにあふれているという意味で役立っているし、それよりなにより、素朴になつかしい。

金崎先生の授業を受けていたのは、テキストにはさまっていた試験問題によれば、昭和59年らしい。科目名がFrançais B-3なので、フランス語を第一外国語に選択した学生だけが受講する、小さなクラスだったのだと思う。入学年度は58年だから、2回生の時である。

この授業は、私にとっては、正直、大変だった。教科書として使われていたのは、Stendhalの*De l'Amour*を教材用にアレンジした薄い本だったのだが、これがもう、難しくて読めなくて、のたうちまわったのを覚えている。だが、おかげで「恋愛の誕生」の仕組みには強くなったし、ザルツブルクの塩鉱など、どう考えても行けそうにない場所を、やたらに詳しく想像できるようになった。«cristallisation»という語も、もちろん、絶対に忘れない。

もうひとつ大変だったのは、先生が、授業の冒頭に毎回のように、フランスの音楽を聞かせてくださって、私たちはその歌詞を紙に書き取っていくのだった。これがまた、難しくて聞き取れなくて、悔しくてのたうちまわった。何となく聞き取れたのは、«Au clair de la lune»の歌詞だけだったので、他の曲はまったく覚

えていない（残念です）。

金崎先生のこの授業が、私にとって苦痛だったかと言えばそうではない。小さなクラスで、明るい部屋で、楽しかった記憶とがんばった記憶が混ざり合っている。2 回生は確かに、初心者ではないが、習熟もしていないという意味で、大変難しい学年である。同時に、難しいからこそ、その後ステップアップができるかどうか、挑みがいのある 1 年でもある。実際に、2 回生を教えていると、その伸びの速さと健やかさに驚かされることがたびたびある。私自身も、のたうちまわりながら、のびのび育てていただいたのだと、今でもそう思って感謝している。

2002 年度のガリアの研究会で、「ジョルジュ・サンドとベリー地方」という発表をさせていただいた。たしか、フランス文学における地方について考察をする、ミニシンポジウムのスタイルだったと思う。博士後期課程の院生だった私にとって、こうした場所で話をさせていただくのは、大変光栄なことで、緊張でいっぱいだった。同じ登壇者の中に金崎先生がいらして、フロベールの *Madame Bovary* の話をされていた。詳細は覚えていないのだが、馬の糞とか農業の話などが含まれていたような気がする。ただただ、金崎先生と同じテーブルの同じ側に坐っているのが不思議で、誇らしかった。

現在の職についてからも、先生にはいろいろなことを話していただいた。まだまだ読ませていただくこと、話していただくことがたくさん残っている。ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。

（奈良女子大学研究院人文科学系教授）

金崎さんに助けられた話

濱田　　明

学部 3 年で仏文に進学した 1982 年（昭和 57 年）4 月、仏文は原先生が退官されたばかり、柏木先生が着任されるのが一年後、ディッソン先生が来られる秋まで、先生は赤木先生お一人だったのではないかと思う。その時助手をされていたのが金崎さんだった。授業に出てみたもののどう勉強していいか分からず、予習や辞書の引き方などお尋ねしたところ、「そうね」と穏やかな口調で親切に教えて頂いた。言語文化部に異動されるまでの一年間、文字通り助手の金崎さんにはお世話になりっぱなしだった。こちらが「よろしく」と頼まれたのは、ディッソン先生歓迎の奈良見学ぐらいだろうか。仏文研究室で企画した催しが、辞書を片手に案内したせいかディッソン先生には長らく私が奈良に連れて行ったと間違って記憶されることになった。それも金崎さんのおかげとも言える。

金崎さんとパリでお会いしたのは、パリ解放 50 周年の記念パレードを一緒に見学したことからすると 1994 年 8 月下旬となる。7 月 14 日のシャンゼリゼ大通り

のパレードと違い、夜の喧騒の中、サン・ミッシェル大通りで目の前を通り過ぎてゆく戦車は迫力があり、記念パレードとはいえ、パリ解放を追体験する高揚感が溢れていたように思う。

その後、私は以前留学していたランスに遊びに行ったのだが、駅の電話ボックスに財布、パスポート、航空券など、クレジットカード以外の貴重品すべてが入ったバッグをうかつにも置き忘れてしまった。ランスの友人たちは、気分転換にと麦畑でのアーチェリーに誘ってくれた。それはそれで楽しかったが、私はランス滞在を早々に切り上げ、パリに戻って大使館に直行した。すると通常なら日本まで身元を照会しなければならないところ、パリに身元を保証する人間がいれば早めにパスポートを再発行できるとのこと。すぐに金崎さんにお願いすると、「初めてフランスに来たわけじゃないのに」と笑われたが、快く身元保証人になって頂いた。おかげでパスポートは速やかに再発行され、残りの滞在も有意義に送ることができた。今思い出しても、あの時は本当に助かった。

フローベールの研究者としての金崎さんについては他の方も書かれているだろう。博士論文をまとめられた『フローベール研究―作成の生成と構造－』はフローベール研究に無知な私でも優れた学術書であることは分かった。第一部はフローベールのいくつかの作品全体の構造を時間、空間の分析から鮮やかに提示し、第二部は新たな発見に富む緻密な草稿研究である。一読して大変勉強になった。正直に書くと、ちょうど「聖書と欧米文学」という英独仏３分野の教員が担当する授業を準備していた時で大きな助けとなった。聖書とフランス文学というテーマでどの作品を扱うか毎年思案するところ、その年は、金崎さんの『三つの物語』全体をキリスト降臨にかかわる黙示録テーマとの関係で読み解く考察を授業で話させて頂いた。

金崎さん、長い間お疲れ様でした。いろいろ助けて頂きありがとうございました。

（熊本大学教授）

発見と驚嘆に満ちた真の力作

山上　浩嗣

（以下は、あるネット書店上で、金崎春幸先生の御著『フローベール研究―作品の生成と構造』（大阪大学出版会、2014 年刊）に対するレビューとして掲載した拙文である。この機会に転載させていただく。）

フローベールのほとんどすべての小説作品を対象に、第一部では刊行されたテクスト内の構造を探り、第二部では、原資料や草稿から決定稿に至る変遷をたど

ることで、作家の文学創造の本質的な傾向を見いだそうとする研究書。執筆期間三十年以上におよぶ著者の研究の集大成であり、真の力作である。

全体として、第一部では作家の意図を超えた作品内部の秩序を明るみに出そうとし、第二部では、時系列的なテクスト生成の過程を丹念にたどることで、それぞれの段階における変更をもたらした作家の意図を探求するというように、本書には、二つの対極的な方向性が同居している。副題の用語では前者が「構造」に、後者が「生成」に対応しており、これら二つの語がそれぞれ、著者が目指す目的と方法を同時に示していることが理解できる。

とくに第二部の作業を通じて、著者は多数のきわめて重大な発見を行っている。たとえば、『聖アントワーヌの誘惑』第三稿の草稿段階において、フローベールが、アドニスと犬とアスタルテという三つの対象に同時に言及しているのを、クロウツェル『古代の宗教』に掲載されたある図版の影響であると突き止めたこと、また、第二部５章のなかで、近代都市に現れるイエス＝キリストの死を描いた場面が『聖アントワーヌの誘惑』のプランから削除された時期を確定したことは、その最たる例であろう。

これと関連して、フローベールが、何度も推敲を重ねて練り上げた一節を、最終段階で放棄することがしばしばあったということは、評者にはまことに大きな驚きであった。『ボヴァリー夫人』のエピローグ（オメーが鏡のなかでいくつもの勲章の幻影を見る場面）、同じく『ボヴァリー夫人』のなかの、ルーアン大聖堂で守衛がレオンを案内する場面、そして、『聖アントワーヌの誘惑』のなかの、イエスが近代都市に現れて、罵られながら死ぬシーンなどなどがそれである。こうした事実の発見は、フローベールの創作傾向に関する重要な手掛かりを与えてくれる。本書を読んで、作家の草稿を研究することの魅力と意義の大きさを教えられた。

また、論述の文章はつねに明晰で、簡にして要を得ている。ときおり素っ気ないような印象すら覚えるほどである。精緻な分析の末に導き出した貴重な発見や、丹念な調査を経て得られた独自の見解も、何気ない調子で語られている。論述が冗長になりすぎないように、ポイントを押さえるための配慮も随所に認められる。全体を貫くこのような簡潔さへの指向性を非常に好ましく感じた。ときおり笑いを誘われる描写に出会うところも本論の魅力のひとつである（第二部５章やエピローグなど）。

本格的なフローベール研究書でありながら、読書の醍醐味を感じさせてくれる好著である。

（大阪大学教授）

資料室の扉

河合　美和

私が初めて大阪大学の先生方とお仕事をさせていただいたのは社会人になって1年目の年でした。

お打ち合わせのための出張も夏の大阪も初めての経験でした。大阪駅に到着し、ホームに降りた時のことは今でも鮮明に覚えています。肌で空気を感じたのも初めてのことでした。とても熱く、重たい空気で、とにかく暑くて、本当に驚きました。資料室で緊張して座っていたことも昨日の事のようです、とは怒られそうなので申しませんが、忘れることはできません。数えてみましたら、10年以上経っていました。

教科書が完成するまでの間、月に1回お打ち合わせをしていただきました。教科書の単語や例文を1つ1つ検討していくという私にとってとても貴重な時間を2年以上同席させていただきました。待兼山の坂道や資料室の窓から見える木々もすべての季節を体感することができました。台風で途中新幹線が止まってしまったこともありました。桜の花や紅葉も素敵でした。しつこいようですが、夏はいつも厳しい暑さでした。

石橋駅から大学へ向かう坂道はいつも一人でしたが、帰りは必ず先生方と一緒でした。ここからが私の本題かもしれません。長くて楽しい夜の部です。石橋や阪急沿線のたくさんのお店に連れて行っていただきました。私の好きなお店ベスト20（10軒にはとても絞り込めません！）や夜の部のお話を書きたいところですが、これは先生方と私だけの秘密にさせてください。

今、改めて振り返ってみますと、資料室の扉は今の私につながる扉でした。この扉を開け、通る機会をいただかなかったら、私は今の私とはまったく違っていたと思います。その扉を開けると必ず金崎春幸先生と春木仁孝先生がいらっしゃって、迎えてくださいました。

金崎春幸先生、春木仁孝先生、本当にありがとうございました。

（元朝日出版社フランス語テキスト担当、現在はフリーの編集者として活動中）

古仏語との出会い

足立　和彦

1996年度に大阪大学文学部に入学した私は、初級フランス語の授業を春木先生に教わりました。その時に使った、先生がお作りになった教科書『フランス語へ

のかけ橋』は、今も大事に取ってあります。頁を開くと自分の拙い書き込みが目に飛び込んできて、懐かしい思いに囚われます。もっとも、当時の私は怠惰な学生でしたので、今となっては無事に通していただいたことを僥倖のごとく感謝するばかりです（当時、春木先生は厳しい先生と学生の間で噂されていました）。と同時に、今へ至るまでの私の「フランス語道」の最初の手ほどきをしていただいたことに、心より御礼申し上げたいと思います。

そして、多少は気を入れ直した大学院時代に、春木先生に古仏語を教えていただいたことも貴重な経験となりました。フランス語で書かれた文法書のコピーを一人ずつに配っていただいて、それを頼りに予習に励んだことが懐かしく思い出されます。綴りの規則がまだ明確に定まっておらず、地方による相違も見られるという古仏語を、楽しむように読んでいらっしゃった先生のお姿が目に浮かびます。その時に読んだテクストは『オーカッサンとニコレット』と『ロバンとマリオン』でしたが、現代とはかけ離れた、おおらかで自由奔放な世界が広がっていることに驚かされ、魅了されました。文学は趣味で読むもので研究対象にする気はないとおっしゃっていた春木先生に、中世文学の面白さを教えていただけたことは幸運でしたし、先生がいかに寛大に学生に接してくださるかを知ることもできました。

春木先生に温かくご指導いただきましたことに御礼申し上げますとともに、ご退職後の末永いご多幸を祈り申し上げます。先生のご恩に少しでも報いることができますように、これからも誠意をもって、教育・研究に勤めて参りたいと思います。

（名城大学准教授）

春木先生の思い出

井元　秀剛

私が阪大に赴任するきっかけを作ってくださったのが春木先生で、春木先生がいなければ、阪大に来ることも、こうして今このような文を綴ることもなかった。その意味で私の仕事上における最大の恩人である。私の先生との最初の出会いは論文を通してであり、論文や手紙で意見をとりかわしてしばらく後に、初めてご尊顔を拝することになった。最近でこそネットで知り合いになって後に顔を知るというケースも散見するようになったが、当時はまだ珍しく、その出会いを不思議な縁だったなあと改めて思い出している。

きっかけになった論文の日付は1989年で、当時私はちょうど最初のフランス留学を終えて帰国したばかりの大学院生だった。パリ第8大学と東大に出した2つの修士論文のテーマが名詞句の照応表現に関するもので、春木先生の書かれた同

じテーマの論文が、当時その問題に対する帰着点を示したような形になっていた。私の研究は、その春木説を吟味し、批判するところから出発する。そうしてできあがった修士論文の内容の核を最初の雑誌論文として『フランス語学研究』に投稿することになった。どのような経緯をたどってか記憶が定かではないのだが、その投稿前の論文を人を介して春木先生に見ていただく機会があった。その後先生から実に長く詳細なコメントを手紙でいただいたのである。私としては論文でしか名前を知らない大先生が、無名の一大学院生にこれだけ丁寧に応対してくれたのかと感激した。その後学会でもたびたびお会いするようになり、意見を交わす機会も増えたが、そもそも学説の部分では意見の食い違いがあるわけだから、自分は先生には評価されていないだろうと思っていた。ところが、2度目のフランス留学をそろそろ終えようかというときに、日本にいる先生から手紙がきて、阪大に来る気はないかと言う。これには驚きもし、また感激した。先生の手紙に感激させられたのはこれで二度目である。

当時は今と違って公募が一般的ではなく、一本づりのような形で就職ができた。私は本当に幸運だったのである。実際に阪大に来てから、今度は実務や組合活動など、学術研究とは違った側面で先生と接することになる。私は結構いいかげんで抜けているところが多いので、いろいろなところでその姿勢をたださされた。最初に人間を知っていたら採用されなかったのではないかと、先生との出会いの順序に助けられた思いをたびたびしている。先生は曲がったことがお嫌いで、たとえ反対があっても筋を通すという一本気なところがある。どんな小さなこともないがしろにしないから、教科書の原稿などでも、手厳しい。アメリカに在外研修で行っていたときに、日本から「もっとまじめにやれ」と叱責されてサンディエゴの図書館にあったフランス語の語学テキストを必死でめくったことが懐かしい。先生とは専門が重なるので、海外の学会でもたびたび一緒になった。イギリスの田舎町の Aberystwyth で行われたロマンス語学会の際には二人で入り江を見下ろす小高い山に登って、よくこんなところまで来たなと感慨にふけったこともある。もうお別れかと思うと本当に寂しい。

（大阪大学教授）

春木先生の思い出

岩根　　久

来年の3月に春木先生、金崎先生とお別れせねばならぬかと思うと、何とも形容し難い寂しさが胸に沸き起こってきます。両先生それぞれについて、この思いの強さは全く変わりませんが、お一人お一人にメッセージをということなので、ここでは、春木先生への思い出を書かせていただきます。

実を言うと、春木先生は私の恩師ではなく先輩なので、春木さんで構わないようなものの、今となっては、春木「さん」以上の存在なので、他に言いようもなく、春木先生と書かせていただきます。

私が若き春木先生と出会ったのは学部生のころで、印象に残っているのは、我々の前でトランプ手品を披露して下さったことです。カード捌きが実にエレガントで、同僚の井元さんもマジックのお手並みは抜群なのですが、それとは一味違ったお洒落なものでした。

それから幾年か経ち、春木先生はフランス政府給費留学生としてストラスブールに留学され、帰国後、言語文化部の教員になられました。当時の私からすれば、春木先生は高貴なプリンスのような存在でした。

同僚となってからも、いつもお洒落で見識が高く、どこか近づきがたい存在でした。それでも、なんとなく親しくなれたのは、食の好みが近かったせいでしょうか。ここにはどことは書きませんが、今ではお蕎麦屋の情報を交換したりしています。

職に就いてから、意図的に春木先生のマネをしたことは、少しの期間であっても毎年必ずフランスに行く、ということです。一度、滞在期間が偶然重なっていたことがあって、パリの地下鉄で、春木先生は電車の中、私は駅のプラットフォームという状態ですれ違ったことがあります。図書館や本屋でフランス語関係の人と出会うのはよくあることですが、これは珍しい、何かの縁だ、フフフフ、と思いました。

長年近くに居てわかったことですが、春木先生は元来照れ屋で心優しい人だということです。それがなかなかわからなかったのは、春木先生のバシッとした光線がまぶしくて、ちゃんと物事が見えていなかったのだと思います。

最後に、昔言文におられた高岡幸一先生発明の謎かけがあります。春木さんとかけて、顰蹙を買いそうなポスターと解く。その心は「貼る気？」。おあとがよろしいようで。

（大阪大学教授）

精悍、緻密な学者魂

柏木　隆雄

春木さんと机を並べて勉強した時代があったと言えば、驚く人も多かろう。私は生来の怠け者で、特に大学院時代は70年安保や学生運動の余波で、なんとなくだらしない、鬱屈した時間を過ごした。私は大学に入学した時から、夜は家庭教師のアルバイトばかりで、時には土日はダブルヘッダーだったりしたから、勉強は講義に出席する時しかなく、それとても結構いい加減に過ごした。ただ何とな

く心根だけは真面目に、受業生が少ない講義にはなるべく出ようと決めてはいたので、大学院の１時間目にある岸本通夫先生の授業はそれに当てはまり、出席はしたものの修士課程入りたての春木さんと博士課程の私の二人だけだった。ラテン語からフランス語へと移る言語現象を説く岸本先生の授業は、折しも「ユーラシア語族の可能性」という本をご執筆中で力がこもっていたと思う。フランス語の travail は tripalium が語源で、これは拷問の道具であって、そこから苦しめる作業、肉体的労働を示すようになったとか、その他いろいろ、今でも初級を教える時、この授業で得た知識を大いに受け売りして「博学」を誇ったりしている。

春木氏は私などと違って、語学を専門に志すものとして岸本先生の話を真剣に聴いていたに違いない。また岸本先生とは別に、大高順雄先生の授業も同じように二人で聴いた。あるいは学部の学生も数人いたかも知れない。マリー・ド・フランスの黄色いオクスフォード版のテクストは今も書架にある。あれで結構多くの詩編を読んだのではなかったか。後に教室で「フランス文学史」を担当する際、この経験を多少生かすことができたのは幸いだった。岡山大学から集中講義で杉富士雄先生が来られて、中世プロヴァンス文学を青焼きプリントで勉強したのも懐かしい。その時春木さんもすでに修士の学生でいたのかどうか。とにかく大高先生は春木さんの学力を大いに評価しておられた。そんな若い時のある日、紀伊國屋書店で大高先生が訳者として名が上がっている『大学の歴史』の白い表紙を見つけ、そこに春木さんがその翻訳に力を尽くしたことが書かれていた。翻訳に声がかかることもない私は、贔屓の出版社であるみすず書房の本に、春木さんの名前があげられているのを、とても羨ましく眺めたのを思い出す。

語学が専門でも文学は理解できるが、語学は文学の輩にはやたら難しくて歯が立たない。本来そういうことではいけないのだが、私などついつい正面から取り組むことなしに逃げていたので、以後の春木さんの鋭い論客ぶり、深い学識を積んでいく過程を感心しながら、横目で見ているばかりだったが、中でも旺文社の『ロワイヤル仏和辞典』の仕事には瞠目させられた。著名な編者の中に春木さんの名前を見出して大いに誇らしく思ったものだ。それだけではない。文学部に赴任して同僚となると、いろいろの仕事で彼の力量を知ることができた。

とりわけ意義深かったのは赤木・伊地智・岡野３先生が大学紛争時代に作られたフランス語初級文法書の改訂の仕事を一緒にやれたことだった。始めは単なる「改訂」と考えていたが、この際阪大の日本人教員全員で教科書を作ろうとプランが膨らみ、それには言語文化研究科の語学専門の先生の協力が何より必要だった。高岡幸一先生始め文学・語学全員の専任教員の賛同が得られ、毎月一回の割合で、言文の共同研究室で編集会議を開くことになった。とにかくまとまれば良いといい加減な態度に終始する私を叱咤し、高い学問的、教育的レヴェルを維持しようとする他の先生たち、とりわけ春木さんのリーダーシップが発揮されて、まことに頼もしかった。不備な原稿を持ち込むと徹底的に批判されながらも、その会議はとても楽しく昂揚した。今は廃業した甲陽園の老舗料亭「播半」での完成記念打ち上げ会は、雨模様ながら大いに盛り上がり、それが以後の（学生達が言うと

ころの）赤色三部作ができあがる基となった。即ち『エクリチュールの冒険』（阪大出版会）『レクリチュールの冒険』（朝日出版社）『フランス文学小辞典』（朝日出版社）等々。

「播半」で思い出したが、私は春木さんと飲み歩くこと少なく、彼は勉強一筋で、そうした飲食に興味を持つような人ではないと思い込んでいた。ところが議論の後の会や学会の役員会で、彼が日本酒やワインに並々ならぬ一家言があり、銘柄にも詳しく、なかんずく蕎麦屋に関してはきわめて通であることを知った。さらにフランス映画についての端倪すべからざる蘊蓄も。これを忘れては叱られるだろう。彼は何事においても眼光鋭い吟味の人である。おそらく語学関係の集まりでは、春木さんのその面の才能も発揮されているに違いない。

日本のフランス語学会、言語学会に阪大の言語文化研究科が大きな一翼を占めるのも、春木さんを中心とする俊秀の存在が大きい。いつまでも語学オンチではいけないと自らを戒めつつ、難しい言語理論を踏破するのは、加齢とともに不可能に近い。結局春木さんたちを頼るしかない、と諦めている。

（大手前大学大学院研究科長）

実は先輩だった先生（2）…春木先生

加藤　靖恵

年賀状の季節になると、「私が春木先生に出していいのかな」といつも思います。赤木先生にも柏木先生にも感じたことがないためらいです。

大学に入学した折、春木先生はフランス語を第一外国語に選択したクラスのご担当でした。サークルの先輩（M 先輩ではありません）に言われた通り、講義情報なるものを真面目に購入したところ、そこには「鉄人春木」とありました。実際の先生はダンディーでソフトな方でしたが、先生のお話は高度すぎてわからないという先入観でパニック状態でした。今でも、学生が発音を間違えるたびに、「私も１年生のときになんのことかわからなかったのだけどね」と前置きをしつつ、フランス語の音節の切り方の説明をしています。子音２つが連続したら真ん中で切る、«y» は «i» が２つと考える、など、基礎を先生に教えていただきました。福井大学に就職が決まったとき、先生から「あの学年から同僚が出るとは…」とお葉書を頂き、ふと懐かしい学部生時代を思い出しました。女子学生連名でバレンタインデーのチョコレートをお渡ししたことはもうお忘れでしょう。

研究室に入ると、当時助手だった和田先生を訪ねて、言語文化部の岩根先生、北村先生、また小林先生や小谷先生が集まり、院生時代に戻ったかのような楽しそうな光景だったのが印象的でした。春木先生は教科教育法やフランス語学の授業をご担当でしたが、その輪に入っていらした記憶はない気がします。研究室の

大先輩だという実感がわかないのはそのためでしょうか。

国立大学の仏文は日本人教員２名が大半ですが、阪大では毎年、言語文化部の複数の先生が授業を担当され、個別指導を仰ぐこともでき、広い専門領域に触れることができます。学生時代は当たり前のように思っていましたが、他にはない恵まれた環境です。初級のフランス語から専門の勉強、そして就職後もずっと見守って下さる先生の存在は阪大で育った私の貴重な財産です。

（名古屋大学文学研究科准教授）

春木さん、ありがとう。

北村　　卓

春木さんにお会いしたのは、私がまだ学部生だったときのことである。春木さんが修士論文を書き終えられて博士課程に進学しようかというころ、石橋の居酒屋でいろいろとお話を伺ったのが初めてかと思う。その後、留学から戻られ、吉田城さんの後任として、言語文化部（現在の言語文化研究科）に赴任された。当時私は博士課程の学生だったが、しばらくして助手に採用され、続いて言語文化部に移り教養課程で授業を担当するようになった。以後今日に至るまで、春木さんの背中を見ながら歩んできたことになる。公けの場面でも歯に衣を着せぬ物言いで正論を説く春木さんの姿は頼もしく、まさに兄貴分のような存在であった。また阪大のフランス語教員全員の手による『新・フランス語文法』の制作過程では、まとめ役として面倒な作業を一手に引き受けてくださった。実に緻密で粘り強いお仕事ぶりで、本書の刊行は春木さんなしには考えられない。

さて、私が職を得たのは、団塊の世代の子供たち、いわゆる団塊ジュニアが大学生となり、それに対応するため、各大学で教員のポストを増やすことになった頃である。春木さんに続いて、金崎さん、岩根さん、和田さんという面々が言語文化部に集まり、賑やかになった。今思えば、春木さんは金崎さんとともに、ベテランの大高先生や岡野先生、中堅の高岡先生と若手の間にあって、いわば緩衝材の役割を果たしてくださり、おかげで私たちはのびのびと過ごすことができたのだと思う。

春木さんは、こだわりの人である。ご研究はもちろんだが、食べるもの、身に着けるものから書物、映画、絵画、音楽等々、さらには人間にいたるまで、つねにご自身固有の美学的尺度で評価される。それは時に厳しさを帯びることもある。しかし同時に、同僚としての、仲間としての繋がりをとても大切にされてきた。そこに春木さんの大きな魅力があるのだと思う。

春木さんは、研究者として今なお最前線に立たれていて、隠棲するような雰囲気はさらさらなく、正直なところ、そのご退職にたいしてはまったく実感が伴わ

ない。しかし振り返ってみると、あらためて私たちにとって本当にかけがえなのない存在であったことを、つくづく思い知らされる。心より感謝申し上げるとともに、今後自由な時間を得て、ますますご活躍されることを祈念する次第である。

（大阪大学教授）

春木仁孝先生に教わったこと

髙岡　尚子

1982 年に大阪大学文学部に入学したとき、文学部生のうち、第一外国語にフランス語を選択したものだけが受講するクラスを担当されたのが、春木先生だった。そのため、私のフランス語学習初歩の記憶は、つねに、春木先生の教えとお人柄とともにある。

受講学生は、おそらく、20 名くらいだったと思う。誰もがフランス語を学び始めたばかりで、誰もが緊張し、先生と仲間の様子をうかがっている、あの感じが、いまも鮮明に思い出される。先生の授業は、詳細な発音の講義から始まり、準備された単語リストを、指名された学生が大声で読むことが求められた。だいたい、誰の次に自分が指されるかはわかっているのだが、それでも、緊張で身がすくむようだった。特に、feuille, fauteuil などの列が苦手で、どうか、そこが外れますように、と心底願っていた（白状するなら、いまも、feuille や beurre, sœur の発音は苦手です）。

このように書くと、どこまで緊張感のある、厳しい授業かとの誤解を招くかもしれないが、実際にはそういうことではなく、たしかに、緊張はしていたと思うが、底抜けに楽しかった。底抜けに、というのは、初めて学ぶフランス語の面白いことや、めずらしいことが、あふれることのないくらいに、たくさん入ってきた、ということだ。春木先生は、フランスでの生活のこともいろいろ話してくださって、冬だと朝の 8 時でも外が暗いことなど、にわかに想像もできないようなことを聞いて驚いた。後に、フランスに行くことになって、いろいろなことにあまり違和感を持たなかったのは、こうして、初歩の段階から先生方に知恵を授けていただいていたからだと、いまになれば思い当たる。

もうひとつ、最大の緊張の思い出がある。後期の試験の一部だったと思うが、課題として詩の暗唱が出された。忘れもしない（いま、手元にそのときのテキストがあって、課題の横に「発音試験！」とメモってあるから間違いない）、Baudelaire の «Enivrez-vous» である。テキストには、どのように読むかが鉛筆で書き入れられているから、相当がんばって工夫をした跡は見られるし、実際に、ものすごく一生懸命覚えて読んだ記憶がある。春木先生の前で、ひといきに暗唱し終わった後、先生はおっしゃった。「もうちょっと、ゆっくり読めばいいのに」。

そうだった、そうすれば良かったと思った。もっと味わって読むのだったと。

緊張と弛緩と、反省が繰り返された1年が終わって、さて、私のフランス語は上達したのだろうか。よくわからないままに、その後3年が過ぎて卒業し、5年たって大学院に入り、またその後、20数年がたって現在にいたる。いまも、私のフランス語の発音の基本は、この時に教わり、学び、練習した成果の上にあり、それが今度は立場を変えて、教えるときの基本ともなっている。

2012年に、阪大で講義を持たせていただいた折、非常勤講師を招いてくださった会食の席で、ほんとうに久しぶりに春木先生のお話をうかがった。そのときに感じたのは、先生が、あのときから（私が1回生のときから）、まったく変わっておられないということだった。緊張してお話をうかがうこちら側の心持ちも変わっていないからか、先生のおおらかな、底抜けに面白く楽しいフランス語のお話は、尽きることなく流れ込んでくるものだった。

（奈良女子大学研究院人文科学系教授）